

感性を育む和学講座第19回

お盆と田の実の節供

お盆とは

古代中国の道教では7月を「鬼月」とされていました。

1日には地獄の蓋が開く、中元節の15日には蓋が閉まるとされていたのです。

古代中国の行事と、日本に元々あった祖霊信仰が融合され、さらに仏教が結びつきました。

お盆は仏教では「盂蘭盆会」と云われます。

盂蘭盆会の由来に目連の伝説があります。

修行の最中、神通第一の目連尊者が亡くなった母親の姿を探すと、飢餓道に堕ちて苦しんでいるのが見えました。母親を救いたいと思い、釈尊に相談したら修行者たちに、供物を施せば、母親にも届き、救われるだろうと教わり、実践した。

母親は餓鬼から抜け出ることができました。

「盂蘭盆会」はサンスクリット語で倒懸(逆さ吊り)という意味があります。しかし、これには諸説あり、定かではありません。

お盆の日程は13日から16日の4日間とされています。

13日は「迎え火」で、ご先祖様を迎えます。

盆棚に「精霊馬」として、キュウリやナスに割り箸を挿し、キュウリはあの世からご先祖様が早く帰ってくる馬に見立て、ナスはご先祖様が、あの世にゆっくりお帰ってほしいということで、牛に見立てるのです。ご先祖様と少しでも長く居たいという願いがこもっているでしょう。



16日の野火は**送り火**です。ご先祖様が天に昇って行かれるときに迷わないように、道を明るく照らすとの願いがこもっています。京都の大文字焼が有名ですね。地域によっては精霊流しも行います。

盆踊りは地獄で受苦を逃れた亡者たちが喜んでいる姿を現していると云われています。文献に登場するのは室町時代のように。平安時代に空也上人が始めた踊念仏と民間習俗の念仏踊りと合わさり、さらに盂蘭盆会と結びつき広まりました。



田の実の節供

「節供」といえば、五節供(人日、上巳、端午、七夕、重陽の節供)を想像されることでしょう。

五節供ほど一般に知られてはいませんが、地域や町村民による小さな節供と云われる行事があります。

そもそも「節供」とは何でしょうか。一年間で節目に当たる日(特定日)に特別な食物を神仏に供え、神様を迎えたり祖先の霊を祀ったりして、五穀豊穡の祈願や神霊との一体感を得ようとしたのです。

旧暦八月一日に農村地域で行われていた「田の実の節供」もその一つです。

八月一日から「八朔節供」「八朔」または「穂掛祭」とも云われています。

旧暦の八月一日は新暦(現代)では、8月末から9月の頃。そろそろ早稲が実る時期です。新穀を供えて「作頼み」、神様に稲の実りが多いことを祈ります。または、田で作柄(農作物の良否)を褒める**予祝行事**でもあります。



稲刈りなどの農事は地域で、隣近所で助け合います。八月一日には普段お世話になっている方に初穂などの贈り物をするという風習もありました。この風習は、初穂の「田の実」と「頼み」をかけて武家社会にも広がります。室町幕府では公式な行事として採用されているほどです。

八朔の行事は、東日本より西日本の方が盛んでした。ただ、江戸時代になると、徳川家康が八月一日に初めて江戸城に入ったことから八朔には、大名や旗本が白帷子を着て祝辞を述べるために登城する**祝日**となっています。しかし、実際に家康が江戸

城に入ったのは、家臣である松平家忠の日記によれば 7 月 18 日となっているのです。

それが 8 月 1 日とされたのは、豊臣秀吉が小田原征伐後に進めていた関東諸大名の領国画定作業が 8 月 1 日にほぼ完了し、徳川の新しい領地が正式に確定したことで、江戸幕府成立以降、家康の公式の江戸城への入城日と解釈されるようになったと思われます。

恩人などに贈り物をする風習は、7 月 15 日のお盆における先祖への供物を行うことと合わさり、今も「お中元」の慣習として残っています。

ちなみに、京都の祇園では、芸妓さんや舞妓さんが八月一日に芸事の師匠宅に挨拶廻りする姿が、京都の夏の風物詩となっています。

「田の実の節供」「八朔」は地域によって様々な風習が伝わっています。一説では、盆の終わりの行事とあります。お盆は旧暦の 7 月 15 日が中心の行事です。

お盆に迎えた祖霊を送る最終日ということでしょうか。

そういえば、お正月も 1 月 1 日が元旦で、1 月 15 日は小正月と云われているように、約 15 日間あります。お盆も 7 月 15 日から 15 日経つと八朔。

新暦で考えると関係性が見えてこないのですが、旧暦に置き換えると、わかりやすくなります。

それから、八朔、八月一日頃は二百十日(立春から数えて)に当たります。

台風が多い日、風が強くなる日とされているのです。

春に植え付け、育った稲穂。やっと実が付き稲刈りの時期を迎えようとしている矢先に台風などの風災害でダメになるというニュースは、現代でも良く耳にします。

いにしえから、八朔は農家にとっての厄日でもあったのです。

それゆえに、「節供」として田の神様に祈願を習わしとしてきたのでしょう。

富山の八尾では新暦の 9 月 1 日頃に「おわら風の盆」が開催されます。

この祭りは江戸・元禄時代から始まったと伝えられています。名称については風鎮祭、お盆の行事からと言われていますが、定かではありません。

また、奈良の龍田神社、熊本の高森町での風鎮祭も広く知られています。



「風鎮祭」は、八朔の行事と合わせり各地で特色ある行事となり、今に受け継がれているのです。

厄日を、祭りや祝日に変えて特別な時間として家族親戚、仲間とともに共有する。そこには自然を崇拝するいにしえの人々の智慧と祈りが込められています。

贈答文化

親戚や友人、知人と贈り物を交わすのは、世界中にあることです。その中でも、日本は数多くの贈答慣習があるのではないのでしょうか。特にお歳暮やお中元など、季節の贈り物は独特でしょう。

お中元は、前記のお盆のお供え、田の実の節供などの慣習が混ざり合い農耕地域に限らず、お世話になった人に贈り物を行うようになっていきました。

昔は言われた謙虚さを表す「つまらないものですが」という言葉は、現代は言わないのが通例となってきました。代わりに「お口に合えば」、「お気に召したら嬉しいのですが」の言葉を添える方が良いとされています。

ただ、「つまらないものですが」という表現は、へりくだるという謙虚の気持ちを表すだけでなく、お相手に気を遣わさないという配慮もあるのです。

お相手に渡す品物を壊れないようにと箱に入れ、包装紙で包み、それをさらに、汚れないよう風呂敷で包んで持っていく。過剰と思うほど丁寧に扱うのは、おそらく日本だけでしょう。

水引を添えた懸け紙(熨斗)の表書きで品物に込めた「想い」を示します。お祝い事は贈り物に嬉しさを、悲しみ事の際はお悔やみの気持ちを託します。品物は、お相手の心に寄り添う「形」なのかもしれません。

季節ごとの贈り物は、お互いの無事を確認し近況を知るきっかけを作ってくれます。お土産は、旅先でもその人を想っていたという証。

やまと言葉神話国学世界観

カ行

口腔の奥を緊張させ、絞り出すように一気に発音

軟口蓋音＋破裂音

響きから固くて強いもの、**金属的**な(キン、コン、カン)イメージを表す

カ…幽玄、奥深さ、疑問を表す

「霞む」「影」「隠れる」など、はっきりしないけどその分、幽玄で奥深い
文の**語尾**について**疑問を表す**「何々ですか？」

キ…強烈、厳粛なもの、激しいものを示す・

「きつい」「厳しい」「極める」など

ク…カ行のウ段。**閉じる方向**に動き、結合の意味。

「組む」「くるむ」「国」

ケ…表面または**表面に起こる**ことを表す。

体の表面の「毛」表面を加工する「削る」「消す」

コ…凝固、凝集の意味。**完成へと向かう**。

「込める」「凍る」「籠る」